

やぐら：足利家の墓

迦葉堂の奥には、丘の斜面に沿って入り口がアーチ型になった3つの洞窟があります。これらはやぐらと呼ばれており、墓として使うために崖の斜面に掘られたものです。やぐらは鎌倉地域に特有で、中には多くの石碑があります。

伝統的な日本の墓では、死者の遺体は縦穴に埋められます。それに対して、やぐらの中の穴は浅くて洞窟の床に沿って水平に作られています。それぞれのやぐらには、火葬した遺体をおさめた複数の骨壺があります。墓の上には墓石として碑が建てられています。

やぐら型の墓は、街に水平な土地がなかったことから、鎌倉で考案されたものと考えられています。鎌倉を囲む山や丘は柔らかい岩である凝灰質砂岩なので、埋葬のための穴を掘るのが簡単だったのです。

1334年の開山以来、報国寺は影響力の大きな足利家と密接な関係にありました。忠誠な家来の上杉重兼（1375年没）の努力によって、この寺で政治闘争で亡くなった足利家時（1284年没）の魂が祀られました。家時の孫にあたる足利尊氏（1305–1358）は、報国寺の開山からわずか4年後に將軍となり、足利幕府（1338–1573）を打ち立てました。足利家の一部は日本の統治者となり、家時などの足利家の重要人物の何人かが、このやぐらに埋葬されていると考えられています。

秋になると、やぐらを囲む一帯の楓の葉が見事な美しさを見せてくれます。